

富山如大地

— 第136号 —

発行人
亀渕 卓

発行所
富山市総曲輪2丁目8-29
真宗大谷派富山教務所
編集
富山教区如大地編集委員会

電話 076-421-9770 FAX 076-421-9799
教区・別院ホームページ <http://toyama.higashibetsuin.com/>
教務所アドレス toyama@higashihonganji.or.jp



上市町、「千石城山」から剣岳を望む

撮影者：生地 光

もくじ

- ・富山別院報恩講法話 小川一乘氏 2~15
- ・「同期会運動」寄稿 寺田正利氏 16~20
- ・研修会報告 21~22
- ・見聞～こんながやっとっちゃ～ 23
- ・教務所職員退任 新任挨拶 24
- ・教区だより 24~26

報恩講に遇う

報恩講の時節が過ぎました。親鸞聖人が証していくと、予定通りに日程が過ぎていくことばかりに気を取られ、なにやら慌ただしく大切なことの前を素通りしている私のすがたがあります。

世人、薄俗にして共に不急の事を諍う。

〔仏説無量寿經〕真宗聖典五八頁

この語は他でもないそのような私への言葉でないかと思われます。あれやこれやと一体何をしているのか。「報恩」の一語に込められた思いとは……。ところで私は一歳になる双子の娘がいます。ある法話の際に、娘たちが一つのおもちゃを取り合う様子から、「それが自我でしょう」という風に話をしたのです。しかし次の詩に出遇い、肝心なことを忘れていたことに気付かされたのです。

この膝にたわむれる児よ
ひとつの鮮やかな世界にすむお前の眼は
この世界を浅はかだと
わたしにつげる

(「遊心」八木重吉)

それは話をしている私自身が抜けていたことです。結局のところ、話をまとめることにとらわれて、言葉が誰に向けられ、語られているのかを聞いていなかったのです。

親鸞聖人に縁ある者にとって、報恩講は一年の終わりであり、始まりです。改めてこの身を据えて、念仏のいわれを聞いていかねばなりません。

一一四年 富山別院 報恩講法話

「念佛成仏」という仏道

大谷大学 名誉教授 小川一乘氏

本年も富山別院では、十月六日から八日まで二昼夜にわたって報恩講が厳修されました。本誌では、講師の小川一乘氏（大谷大学名誉教授）のご法話を掲載させていただきます。

一 念仏成仏

このたびは、ご縁をいただきて、三日間、六回にわたってお話をさせていただきます。今、私が何を問題としているかと申しますと、講題にも掲げさせていただきましたが、「念佛成仏」という仏道」とであります。特に宗門において「念佛成仏」ということについて、どれほどきちんといただいてるのかということを、私自身も含めまして一度確かめなければならないと思っておりました。と申しますのは、

近代になりまして真宗学の先生方が親鸞聖人の教えを近代的な内容でいろいろおっしゃっておりますが、それで三回にわたりてお話をさせています。今、私が何を問題としているかと申しますと、講題に特に「成仏」という言葉があまり出てこないのです。真宗学の先生を批判する訳ではないのですが、私自身が本当に「成仏」ということを確かなめなければならないのではないかと思います。親鸞聖人の教えは「念佛成仏」の教えであり、このことをきちんとしなければならないと思います。

親鸞聖人がおられた時代では、日本教は「顯密の仏教」と言いま

して、代表的に二つの仏教が存在していました。一つは「顕の仏教」、顕というのは「顕かな教え」であります、伝教大師最澄の日本天台宗です。もう一つは「密の仏教」、密というのは「秘密」であります、弘法大師空海の真言宗です。この二つが日本佛教の代表となっていた訳です。最澄は「三劫成仏」ということを説かれています。「私達は仏と成ることができるが、そのためには、ものすごく長い時間をかけて何度も生まれ変わって修行することによって仏に成ることができる」とお説きになられました。ところが同じ時代に、空海はまったく反対のことをお説かれました。それは「即身成仏」ということです。「そのような

本願を信じ、念佛をもうさば仏になる。

（『歎異抄』真宗聖典 六三一頁）

とあります。その源を尋ねていきますと、「教行信証」の「行巻」では、次のように親鸞聖人がおっしゃっております。

大小の聖人・重軽の悪人、みな同じく齊しく選択の大宝海に帰して、念佛成仏すべし。

（『教行信証』真宗聖典 一八九頁）

修行はいらない。現在のこの身はそのまま仏と成っているのだ。この私は仏と同じである」と説かれました。当時の佛教では、「三劫成仏」と「即身成仏」の二本柱が仏様に成るという教えでした。そんな中で、初めて法然上人がこの両方とも違う「念佛成仏」ということをお説きになりました。私達は「念佛して仏と成る」のであり、その教えをいただいたのが親鸞聖人であります。



講師プロフィール

1936年北海道生まれ。大谷大学文学部仏教学科卒業。文学博士。現職 大谷大学名誉教授。真宗大谷派講師（董理院董理）。西照寺住職。著書『本願一念仏成仏の教え』『仏道としての念仏』『親鸞と大乗佛教』『仏教のさとりとは—釈尊から親鸞へ—』『仏教からみた念仏成仏の教え』など

※本誌15頁に先生の書籍を紹介しております。

「宝海」というのが本願です。これは、選択本願のことです。「選択本願の大好きな宝の海に帰して、念仏成仏すべし」と、このように『教行信証』の中でおっしゃっておられます。これは親鸞聖人ご自身のお言葉です。これが『歎異抄』で「本願を信じ、念仏をもうさば仏になる」というよう語ったと伝えられている源ではあります。このように、誰であっても、どんな悪人であっても「みな同じく齊しく選択の大宝海に帰して、念仏成仏すべし」と申しておられます。

また親鸞聖人は、『入出門偈頌文』という短い論文の中で、圓教の中の圓教なり、すなわちこれ圓教の中の圓教なり。すなわちこれ頓教の中の頓教なり。（同）と讃歎されています。このように「念仏成仏する」、これが真宗であるとおっしゃっておられます。この善導大師がおっしゃっておられる言葉をここで説明している訳です。そして「圓教の中の圓教」ですが、圓は

まるいという字を書きます。まるいということは角がありません。角がないということは完成したということです。角があるうちはだめだということです。また角がなくなつたのが圓だということです。それは完成した教えということです。完成了された教えの中ににおいて最も完成した教えが「念仏成仏」であり、あるいは「頓教の中の頓教」です。「頓」というのはあつという間、速やかにということです。時間をかけずに、あつという間に成仏できるのです。私たち凡夫が、時間をかけて修行などをすることなしに、速やかに仏と成ることができる、その教えの中でも最も速やかに仏様と成る教えである、と説明しているのです。そして、『淨土和讃』の中ではっきりとおっしゃっています。

『入出門偈頌文』真宗聖典 四六六頁）とほつきりおっしゃっています。そして、

『善導和尚義解して曰わく、念仏成仏する、これ真宗なり』

まるいという字を書きます。まるい

ということは角がありません。角がないということは完成したということです。角があるうちはだめだということです。角がなくなることがありますかと、おっしゃっている

と真実との区別が分からぬでどうして「自然の淨土」を知り得ることができますかと、おっしゃっている

ことです。角があるうちはだめだといふことです。また角がなくなつたのが圓だということです。それは完成した教えと、圓教の中の圓教なり。すなわちこれ圓教の中の圓教なり。すなわちこれ頓教の中の頓教なり。（同）

とおっしゃっておられます。この善導大師がおっしゃっておられる言葉をここで説明している訳です。そして「圓教の中の圓教」ですが、圓は

最初に「念仏成仏」ということが親鸞聖人の教えであるということを確認させていただきたいと思いまして、親鸞聖人のお言葉を三つほど挙げさせていただきました。

私達にとって大事な基本です。逆に言うと、仏様に成りたいと願わずに念仏する人は、それは「空念佛」ということです。仏様に成りたいという心がなくてお念佛をしていたら、それは何のための念佛なのでしょうか。何のための念佛であるかといふ

二 仏様に成る

念仏成仏これ真宗
万行諸善これ仮門
權実眞仮をわかずして
自然の淨土をえぞしらぬ

念仏して仏様に成るということが私達にとって大事な基本です。逆に言うと、仏様に成りたいと願わずに念仏する人は、それは「空念佛」ということです。仏様に成りたいという心がなくてお念佛をしていたら、それは何のための念佛なのでしょうか。何のための念佛であるかといふ

ことが、どうも最近曖昧になつているように思います。

例えば、「あなたは何を願つて生きていますか」と問われたら、「平和を願つて生きている」と答えます。それではだめなのです。念佛者は即座に、「私は仏様に成りたいと願つて生きている」と答えないといけないです。それが一番大事なのです。仏様に成りたいと願つて生きている者と答えないといけないです。佛様に成りたいと願つて生きているとき、「平和であってほしい」という思いが湧いてくるのです。「念佛者は世界の平和を願つて生きる者である」というのはごまかしです。念佛者はあくまで仏様に成りたいと願つて生きる者です。そして仏様に成りたいと願つて生きる者は、ごく自然に平和であつてほしいという気持ちをいただこうとができるのです。しかし、「仏に成ると願つて生きている」とは、なかなか言い切れないとすれば、それはどうしてなのでしょうか。これが現在の大きな問題ではなかろうかと思ひます。

親鸞聖人の教えに大変深く傾倒さ

れて、親鸞聖人の教えは素晴らしいと言つておられる方はたくさんいます。私がそういう方々に「仏様に成りたいと願つて生きていますか」とお尋ねすると、「それは当たり前にあります。何のためにご住職をしているのでしょうか。生活のためだけではないと思います。やはり、ご門徒と一緒に自らも門徒として親鸞聖人の教えをいただきながら、念佛して仏様に成りたいと願つて生きている、それが寺にご縁をいただいた者でしょう。それがいつの間にかお寺は生きておりやすいための職業になつてしまつてゐるのではないか。これは、根本的な誤りですね。

ご存知のように、淨土真宗以外の方は「ご門徒」とは言いません。「檀家」と言います。淨土真宗の場合は檀家とは言わないので御同門、御同行として、門徒と言います。これは宗門においてもそうですね。ご住職方の研修会においても、「あなたは仏様に成りたいと願つていますか」とお尋ねすると、「そんなことは当たり前です」とおっしゃる方は案外少ないのです。「そういうお尋ねを初めていただきました」と言つてびっくりされる方が多いのです。

ある真宗学者の方にお尋ねしたら、「今どき仏様に成りたいなどと思つてゐる人がいるのですか」と、そういう風に開き直る人も中にはいるのです。何のためにご住職をしているのでしょうか。生活のためだけではないであります。しかしながらお方もたくさんいます。そうなると、親鸞聖人の教えを讃歎されているのではなく、自分の生き方の上に立つて親鸞聖人の教えの都合の良いところを讃歎しているだけなのです。それが寺にご縁を立たずして仏道を語る」という道に立たずして仏道を語る」のでしょうか。これは頭の良い人が陥りやすい欠点なのです。

お淨土という言葉が仏教の中でどういった意味であるのかを学び確かめることがないで、自分の思いだけで「お淨土とは、平和で、平等で、自由な世界である」という人がいます。とんでもないです。それは人間の理想の世界です。お淨土は、人間にとつての理想の世界ではありません。そのように自分勝手に解釈をする訳です。かつて昔は、貧しくて生きることに苦しんでいた時代は、衣・食・住が満ち足りてゐるのがお淨土であると言つていましたが、これは、貧しい時代にそういう理想を淨土に求めていたのです。今はこの世に、



衣・食・住が満ち足りましたから、わざわざお淨土に行つてそれを満たさなくても良くなつたのです。そうしたら今度は、「平和で、平等で、自由な世界がお淨土である」と、こうなつてしまひます。時代によつて、ころころ変わつていきます。人間の思ひによつて描かれ、人間の思ひによって理想化されている世界は、決してお淨土ではありません。淨土といふことがどのように説かれてゐるかを仏典に確かめて、親鸞聖人の教えに基づいて確かめて、言葉をきちつと押さえていかないと、人それぞれ

思ひによつて描かれ、人間の思ひによって理想化されている世界は、決してお淨土ではありません。淨土といふことがどのように説かれてゐるかを仏典に確かめて、親鸞聖人の教えに基づいて確かめて、言葉をきちつと押さえていかないと、人それぞれ

の勝手な解釈が様々に語られて、その言葉の本来の意味が分からなくなつてしまひます。そういう問題がたくさんあります。

三 目覚め

お釈迦様の教えから親鸞聖人の淨土真宗も流れてきてゐる訳ですから、仏様に成るということがはつきりしていないとお念佛もいただけないのです。お念佛は仏様に成りたいと願つて生きるもののがいたるもののです。そうしますと、仏様に成るということはどういうことなのでしょうか。

「私が生きているのだ」と皆さんは思つてゐるでしよう。「私が歳を取る」「私が病氣をする」「私が死ぬ」と、このように「私が生きている」のであるから頑張らなければいけないのです。「私が生きている」のであるから、私の都合よく生きないといけない、自分の思い通りに生きられるのが最高の幸せだと思うのです。そのように思つて生きているのが人間なのです。

これは人間の業と言つていいでしょ。人間だけが、「私が、私が」と言つて苦しんでいます。仏様の目から見たら勝手に苦しんでいるのです。これが人間の姿なのです。お釈迦様は、なぜ人間だけが生老病死に苦しむのであらうかと問われたのです。他の生き物を見ていたらちつとも苦しんでいるように見えない、い

たゞいたいのちのままに、それなりにちゃんと生きています。ところが、人間だけが「老いるのは嫌だ、死ぬのは嫌だ」と言つて生きているのです。その根源は何かと言ふと、この「私」が厄介なのです。

そこでお釈迦様は、その「私」とは一体何者なのだろうかと考えられました。これさえなければ生老病死に苦しむこともないのです。お釈迦

様は苦行されながら、「私は一体何者なのか」と考えられました。その結果、お釈迦様が得られたのが、「私はいなかつた」ということです。どうしたことかと申しますと、私がこうしてお話しているのはなぜかと、私が話をしてゐるのではなく間なのです。

そのことに目覚められたのが仏様なのです。それがお釈迦様なのです。分かりやすく言うと、「私が生きている」のではなかつた、「生かされている私」であった、と自分のいのちへの目覚めを持たれたのがお釈迦様なのです。そこから仏教は始まつ

いのです。様々なご縁が、私と成って話をしているのです。私を今日のただ今、この瞬間の私までお育て下さったご縁が今お話をしているのです。分かりやすくいうと、今私は七十八歳ですが、七十八歳になつたらみんな私と同じ話をするかといったら、そうではありませんよね。お寺に生まれさせてもらつて、仏様の教えを学ばせてもらつて、親鸞聖人の教えに出遇わせてもらつたから、こういう話ができるのです。そういうふうに私を私たらしめてくださつた様々なご縁が今、私と成つてお話をさせてもらつてゐるのです。そういうふうに「私が生きている」のではなくて、様々なご縁によつて「生かされている私」であったと気付かれたのです。

そのことに目覚められたのが仏様なのです。それがお釈迦様なのです。分かりやすく言うと、「私が生きている」のではなかつた、「生かされている私」であった、と自分のいのちへの目覚めを持たれたのがお釈迦様なのです。そこから仏教は始まつ

ているのです。考えてみるとみんなご縁のままだったと。自分の力で生きてきたつもりでいたけれどもそうではなかった、みんなご縁のままにしか生きて来なかつたのだ、と。ご縁のままにしか生きることのできなこの「私」であつたのだ、と。そういう自分のいのちへの目覚めを持った方が仏様なのです。

そうしますと、私の話を聞いて下さつて「その通りだ」と同意して下さつた方は仏様なのです。仏様は目覚めたお方ですから、「ああ、そうだった」と。「私は自分で生きているつもりでいたけれども、ご縁のまにしか生きて来なかつたのだ」と、

ご縁のままにしか生きることのできない私だったので、そのことに目覚めたのがお釈迦様なのです。何も遠慮することはないのです。そのように目覚めたら皆さんもお釈迦様と同じなのです。目覚められたのですから。仏様のことを目覚めたといいます。何も難しくはないのです。

「ああ、そうだったのか」と気付くのです。気付くのはご縁があれば誰

でも気付けるのです。「自分のいのちではなかつた、いただきものだつた」と気付くのです。そして、そのように気付かれた、目覚めた仏様の教えに出遇つて、「私もそういう目覚めをいただいて、生きる者となりたい」と願つて生きるのが念佛者なのです。そのところをはつきりしないと、「何のためにお念佛を称えているのですか」ということになりります。どうか死んだらいいところに行けますようにと念佛を称えるとか、死んだおじいさんやおばあさんのために念佛を称えるとか、それではだめなのです。

親鸞聖人は、

父母の教養のためとて、一返にて
も念佛もうしたること、いまだそ
うらわず。

(『歎異抄』真宗聖典 六二八頁)

「念佛成仏」のためなのです。この世が平和でありますようにと祈つて念佛するのもだめなのです。念佛はあくまでも仏様に成るためです。仏様の目覚めに、お釈迦様の目覚めに出遇つて、私もそう成りたいと願うところから念佛をいただいていくのが、浄土真宗です。

でも氣付けるのです。「自分のいのちではなかつた、いただきものだつた」と気付くのです。そして、そのように気付かれた、目覚めた仏様の教えをきちつと踏まえながら、お念佛を喜ばれていた方です。単に有難い、有難いというだけではないのです。浅原才市さんには、ハッと思うような素晴らしい歌があるのです。私は浅原才市さんに関心がありましたので、畠中光享画伯と共同で『妙好人・はたなかこうよう』といふ題で『妙好人・あさはらさいち』というカレンダーを作りました。その中に今日のお話に関係する浅原さんの歌があります。この才市もご恩でできました

この仏様と成ったお釈迦様の教えをいただいて仏様に成りたいと願つた人のお言葉を申し上げたいと思ひます。お念佛を喜ぶ人のことを善導大師は「妙好人」とおっしゃいました。「妙」というのは妙なるもの、素晴らしいものです。素晴らしいものをおむ人が妙好人です。善導大師は、お念佛を喜ぶ方を妙好人と褒め讃えたのです。

この才市もご恩でできました
ご恩おもえ巴 みなご恩
なむあみだぶつ なむあみだぶつ
(浅原才市)

浅原才市の言葉』というカレンダーを作りました。その中に今日のお話に関係する浅原さんの歌があります。この才市もご恩でできました

この仏様と成ったお釈迦様の教えをいただいて仏様に成りたいと願つた人のお言葉を申し上げたいと思ひます。お念佛を喜ぶ人のことを善導大師は「妙好人」とおっしゃいました。「妙」というのは妙なるもの、素晴らしいものです。素晴らしいものを好む人が妙好人です。善導大師は、お念佛を喜ぶ方を妙好人と褒め讃えたのです。

これは、今この富山別院の報恩講でお話している私の話の真髓をちゃんと捉えています。私が生きているのではない、様々なご縁によつて生かれている、ご縁によつてしか生きることのできていない私でありますけれども、ともすると、「ありがたや」だけの篤信の人が多いのですが、私が気になつてるのは、妙好人のお一人で浅原才市(島根県)／

と言われました。「ご恩おもえればみなご恩」と。「みな」というのは、どういう意味かと申しますと、私にとつて都合のいいご恩も都合の悪いご恩もみんなご恩だ、ということです。そして「この才市もご恩でできました」とあります。これが仏様に成りたいと願って生きている才市さんの姿勢がきちっと表記されていました。「私はご恩でできております。なんもつたないのうござります。なんまだぶつ、なんまだぶつ」と。

例えば、「ご法話などで「ご恩をいたして生かされております」といふ言い方をされる場合がないでしょ

うか。だけど、「ご恩をいたして生かされている」というと、少し困るのです。都合のいいご恩が来たら「ありがとうございます」となりますが、

こんな目に遭わなければいけないのか」と思うのです。ご恩が愚痴に変わっていくのです。なぜならば、い

ただく私がどうしようもない私だからです。ご恩をいただく私は、自分にいいものだけ欲しいのです。自分

に都合の悪いことはいらないのです。例を挙げると、病気にならうかどうか。「ああ、もつたない、病気になりました。ありがとうございます」と言えますか。才市さんは「ご恩おもえば みなご恩」と言わかれています。病気になるのもご恩なので。そうでしょう。「私が生きている」のなら病気にはなりたくない。でも、ご恩のままにご縁のままにただ今、瞬間、瞬間のいのちを賜っている。病気もご恩、ご縁です。

昔、私の寺のある門徒のおじいさんの家にお盆のお参りに行きました。一緒に『正信偈』をあげてお参りを

し、その後で一緒にお茶を飲んでいましたら、そのおじいさんが「リウマチというものは痛いものだ」とおっしゃいました。そして、私が「痛いのだね、大変だね」と言うと、その

おじいさんは、私の愛想があまりよくなかつたからなのでしょうか、「ご院さんは、まだ若いからリウマチの痛さが分からぬのだろうね」と言われました。それに対して、私は「死んだら痛くないよ」と言いま

した。そうすると、そのおじいさんはお念佛をいただいている方でしたので、「もつたないことを言ってしまった」と言われました。お念佛をいただいている方にはピンと分かれてこなかつたら病氣にもならないし、死んだら痛くもないのです。生まれてきたから病氣になるのです。そこで浅原才市さんが「この才市もご恩でできました」とおっしゃっていました。それが仏の世界です。そのことをいただくものが生かされているというお釈迦をいただいているのです。お念佛でございま

るのが私達です。そうすると都合のいいものだけが喜べて、都合の悪いことは喜べないので。いたくご縁を私が選んでしまうのです。

二月には「福は内、鬼は外」と豆まきをするでしょう。「福だけ来てくれ、鬼は来るな」ということです。これも人間の思いです。「鬼は内」とはなかなかなりません。鬼が私となるつていただいたおかげで、今まで見えたなかつたいろんな世界が見えてくるのです。病気が私となってくれたおかげで、健康な時には気付かなかつた人の情けや親切やいろんなものが見えてきます。病気はいいご縁

だったなと、病氣を喜ぶことができる世界が開かれてくるのです。いのちあればこそ病氣にもなれなと、そういう世界が開かれてくるのです。これが生かされているというお釈迦様のお覚りの基本なのです。

ここで浅原才市さんが「この才市もご恩でできました」とおっしゃつているのが最高なのです。これが仏の世界です。そのことをいただくことができたのもお念佛でございます。だから最後に「なむあみだぶつ、なむあみだぶつ」とお念佛するのです。これは完璧な歌ですね。これはちゃんと仏教の基本を押さえながら、お念佛は何のためのお念佛かということを表しています。「この才市もご恩でできました。もつたのうございます。なみあみだぶつ、なむあみだぶつ」と言って、そのことに目覚めさせてくださったのがお念佛です。これが「念佛成仏」という世界です。

そのようにお釈迦様がご縁ということをおっしゃるのは、ご縁をいただくのではないのです。ご縁が私と

なってくださっているのです。福も鬼も私となっているのです。だから、時には喜んだり時には腹を立てたり、時には人と仲良くしたり時には人と喧嘩しながら生きているのが私達です。みんな福と鬼が私となってくださっているのです。そのことを大らかにいただいて生かさせてもらつていく世界が開かれているのです。

このように「念佛成仏」ということは、念佛を申さば仏に成るという目的のために、ご本願からお念佛をいただかせてもらつてしているのであると。そのことをきっちり押さえていかないと、お念佛が呪いになつたり、祈りになつたり、おかしなものになつてしまふのです。

五 修行

お釈迦様の説法を聞いて仏様に成ったお弟子さん達は、それでも修行するのです。仏様に成ったのだから修行しなくていいのではないかと思いませんが、そこが問題なのです。目覚めて仏に成ったけれども、目覚めた



通りに生きていらない自分がいるのです。これが厄介なのです。生かされているいのちであつたなといただきながら、「私が、私が」と言つて生きている自分がいるのです。それで、お釈迦様のお弟子さん方は修行されたのです。仏様と成るために修行した訳じやないので。煩惱に眼さえぎられている己がどんどん見えてくるのです。そして、目覚めた通りに生きる者と成りたいと願つて修行したのです。

中国や日本の仏教では、仏様に成るために修行をすると言うのです。

仏様とは何かが分からずにどうやって修行するのでしょうか。マラソンで言えば、ゴールがはつきりしてい

るから、ゴールに向かって走るのでしょう。どこにゴールがあるか分からなくて走っていたらおかしいですね。このことを、日本仏教の中で明確にしたのが、曹洞宗永平寺の道元

禅師です。道元禅師は「なぜ座禅をするのか」と、『正法眼藏』の最初の「辨道話」で説いています。座禅をして覚るのでないのです。それま

での天台宗や真言宗は覺りを求めて修行をしていましたが、それとは逆転しているのですね。仏教はそうじやないのです。お釈迦様の覺りの一端をいただいたからこそ、座禅しなければならないのであると、そうおっしゃっています。お釈迦様の覺りの一端に触れたからこそ、そのようにはなつていない己を、座禅によつて

そのようになるように座禅をすると、ということをおっしゃったのが道元禅師です。これは、親鸞聖人の時代の天台宗や真言宗とは違つた、新しいタイプの聖道門なのです。

愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して

『教行信証』真宗聖典二五一頁
雲々と、どれだけ修行しても、ムラムラ湧いてくる世間の事柄に対する執着から離れることが出来ないのです。仏様のお覺りのとおりに生きる者と成れないのです。绝望する訳です。そのときには、たまたま聖覺法印の導きによって、法然上人の存在を知る訳です。聖覺法印は天台宗のお坊さんですが、法然上人の教えに傾倒した方です。もしあのとき法然上人がおられなかつたら、親鸞聖人は絶望のあまり自殺をされたぐらいだつたと思うのです。百日の参籠ですから。それほどまで苦悩したのでしょ

六 たすかる

親鸞聖人は比叡山（天台宗）において、本当に目覚めた仏様のとおりに生きる者と成りたいと、二十年頑張ったのです。そして绝望するのです。具体的には、

ただ念佛して、弥陀にたすけられ
まいらすべし

（『歎異抄』真宗聖典六二七頁）

と、これだけなのです。だけど、これをお聞きになられて、親鸞聖人はアッと気付くのです。ここが大事なのです。比叡山で二十年間の努力をし、その結果、絶望してしまった親鸞聖人であるから、何の説明もいらないのです。「ああ、そうだったのか」と初めて目覚めるのです。その後、法然上人の元へ百日の間通い、法然上人から教えを受けて、ご門弟になられたのです。

「弥陀にたすけられる」とはどういうことでしょうか。「たすけられると」という言葉が『歎異抄』の「聖道の慈悲」のところにもあります。ものがあれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれども、おもうがごとくたすけとぐること、きわめてありがたし

（『歎異抄』真宗聖典六二八頁）

私達が人を助けるのです。人間が人間を助けるのです。阿弥陀様によって助かるのとは全然違うのです。それを一緒にしたら大きな間違いです。「ただ念佛して、弥陀にたすけられまいらすべし」というのは、仏に成りたいと願っているこの私を、仏に成れるようにお助けくださるのが阿弥陀如来、という意味です。それは、世間のことで人を助けてあげるといふことじゃないのです。それは人間同士のヒューマニズムです。それはそれで大事だけれども、「弥陀にたすけられまいらす」、阿弥陀様に助けられるということはそんなことはないのです。こここのところは大事なところです。このことが親鸞聖人には分かったのです。それは比叡山の二十年があるからです。仏に成って、仏に成った通りに生きようとたけれど、どうしてもそうなれず、絶望しきっていた親鸞聖人であるからこそ、仏に成りたいと願っているこの私を、仏に成れるように助けてくださるのが阿弥陀様ですよ、と。それが「ただ念佛して、弥陀にたす

けられまいらすべし」という一言なのです。

（『歎異抄』の最初に、

弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて念佛もうさんとおもいたつこころのおこるとき

（『歎異抄』真宗聖典六二六頁）

と述べられています。阿弥陀如来にたすけられて往生するのです。この世の中の悲しみや苦しみがなくなるという世間の話じゃないのです。阿弥陀如来の「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせ往生をばとぐるなりと信じ」るのです。これは淨土真宗の基本ですね。ここで「たすけられる」というのは先程と同じです。「弥陀の誓願の不思議によつて」この私が仏に成ることができるのです。私のような「煩惱成就のこの凡夫が仏に成る」ということはありえないことなのです。こんな私が仏の目覚めに出遇つても、仏のように生きるださるのです。それが「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせ往生をばとぐる」ということです。

このことをものすごく分かりやすくご説明下さっているのが、親鸞聖人の『唯信鈔文意』という書物です。先程の聖観法印がお書きになられた『唯信鈔』の中に取り上げられていました。それが「ただ念佛して、阿弥陀様の本願であるとおっしゃるのです。だから「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせ」と。たすけられるということは、先程、申しましたが、仏様と成りたいと願つて生きる者を仏様に成れるようにお助けくださる、そういう意味なのです。「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせ往生をばとぐるなり」と述べています。私達が仏様と成っていく、最終的に仏様のお覺りのとおりに身を委ねていける世界は、往生をとげるということです。それが「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせ往生をばとぐるなりと信じ」るのです。これは淨土

これが阿弥陀様の本願であるとおっしゃるのです。だから「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせ」と。

たすけられるということは、先程、申しましたが、仏様と成りたいと願つて生きる者を仏様に成れるようにお

助けくださる」という意味なのです。

る法事讚の漢文を、親鸞聖人が分かれやすく噉み碎いてくださつてお書きになつてゐるのが『唯信鈔文意』です。その『唯信鈔』の中に、

能令瓦礫变成金（能く瓦礫を変じて金と成さしめる）

と、石、瓦、礫を黄金に変えるといふ漢文があります。それを親鸞聖人は『唯信鈔文意』の中で注釈されていますが、その中で

いし・かわら・つぶてのごとくな るわれらなり

（『唯信鈔文意』真宗聖典 五五三頁）
とおっしゃつておられるのです。煩惱だらけの、煩惱成就のこの私が「こがね」になる、つまり仏様に成れるのだとおっしゃるのです。「いし・かわら・つぶて」はどれだけ磨いたつて光らない、黄金にはならぬいのです。でも、そういうことがあらうとに誓願不思議が説明されています。

「いし・かわら・つぶてのごとくなるわれらなり」というのは、どういう人かとすると、商いをしたりして金と成さしめる

いる人のことです。仏様なんてどうでもいい、とにかく食べる、生きるだけの生活に追われて生きている人です。これが「いし・かわら・つぶてのごとくなるわれらなり」なのであります。これは、例えば蓮如上人の『御文』の中に、よく使われる同じような言葉があるのです。

ただあきないをもし、奉公をもせよ、猶・すなどりをもせよ、かかるあさましき罪業にのみ、朝夕まとおっしゃつておられるのです。煩惱だらけの、煩惱成就のこの私が「こがね」になる、つまり仏様に成れるのだとおっしゃるのです。

「いし・かわら・つぶて」はうこうどいぬるわれらごときのいたずらものを、たすけんとちかいまします（『御文』一一三 真宗聖典 七六一頁）

商いは商売です。奉公は今で言えばサラリーマンです。猶・すなどり（漁）というのは、私達が食べる肉やお魚を捕つて生活をしている者です。「かかるあさましき罪業にのみ」というのは、それだけで生きているというのがあさましい、罪深い行い

だということです。「罪業にのみ、朝夕まどいぬる」というのは、朝から晩まで生活のことばかり考えていることです。それを「たすけん」とお誓いくださっているのが「弥陀の本願である」と蓮如上人がおっしゃつておるのでしよう。これと一緒ですね。

私達は生きるために一生懸命働いています。でも、それだけで人生が終わってしまったら、親鸞聖人は「空しい」と、蓮如上人は「罪業だ」とおっしゃるのです。厳しいですね。ご縁によって生かされていることへの目覚め、生きることへの喜び、そういう教えに出遇つていくことが大事なのです。人間として生まれたことへの意義というものをきちっとおっしゃるのです。

ただしていく教えに出遇わなければ、何の意味もないのです。その様に蓮如上人は『御文』で諭してくださつてゐるのです。

七 親鸞聖人の念佛

宗門では「本願念佛」ということをおっしゃいます。親鸞聖人の教えは本願念佛の教えであるということは間違つていません。本願を信じ念佛を申す教えであります。では、何

だということです。「罪業にのみ、朝夕まどいぬる」というのは、朝から晩まで生活のことばかり考えている人がとてて生きることだけに一生懸命になつている人のことです。仏様なんてどうでもいい、とにかく食べる、生きるだけの生活に追われて生きている人です。これが「いし・かわら・つぶて」というのは、瓦礫が黄金になるとおっしゃつておるのでしょう。これと一緒ですね。

「いし・かわら」が仏道です。その「われら」が仏道に成れるのです。仏様に成りたいと願つておられる者が、仏様に成るということです。こんなことは世間の常識ではありません。それは世間の常識ではありえない不思議なおはたらきをしてくれるのが弥陀の本願なのです。これは人道のことではなくて仏道です。仏道のことを親鸞聖人はおっしゃつておられるのです。

親鸞聖人がおっしゃつておる「いし・かわら・つぶてのごとくなるわれら」というのがあさましい、罪深い行い

のために本願を信じ念仏するのでしょうか。仏に成るためでしょ。その目的がカットされているのです。なぜカットされたのかなと思います。私は本願念仏ということを批判している訳ではありません。本願は大事です。本願を信じ念仏を申すことが、淨土真宗の大事な教えです。しかし、それは「本願を信じ、念仏もうさば仏になる」ということです。仏に成ることをきちっと押さえないと、あなたは何のために本願を信じ念仏するのですか、と問われたら、答えに詰まってしまいます。そういう状況になつている人が多いのではないか。「弥陀の誓願不思議にたすけられまいさせて」ということは、仏とは何かということに目覚めて、その通りに生きる者と成りたいと願いながら、それに背き続けて生きているこの私を「それでいいのだ」と、仏様に成れるように願つてくださっているのです。それが「弥陀の誓願不思議にたすけられる」ということです。これは念仏成仏という教えの上から、明確なことなの

ですね。私達はお念仏をいただきながら、本当に私のお念仏は仏に成りたいと願つてある念仏なのか、必ず仏に成れることを喜んでいる念仏なのか、そういうことを確かめなければいけないと思います。

富山は真宗王国ですね。皆さん、生まれた時から「なんなんだぶ、なんなんだぶ」と言つてゐるでしょう。大変、失礼なことを申しますが、訳が分からなければ「なんなんだぶ、なんなんだぶ」と言つていませんか。おじいさん、おばあさんが「なんなんだぶ」と言つていた、父さん母さんが「なんなんだぶ」と言つていて、なんが「なんなんだぶ」とは何なのですか。なほほんなど、おじいさん、おばあさんが「なんなんだぶ」と言つていて、父さん母さんは、だから、私も「なんなんだぶ」と言つて、なんが「なんなんだぶ」と何なのですか。皆んながそう言つていて、ということになつていていませんか。「なんなんだぶ」とは何なのですか。なほほんなど、おじいさん、おばあさんが「なんなんだぶ」と言つていて、父さん母さんは、だから、私も「なんなんだぶ」と言つて、なんが「なんなんだぶ」と何なのですか。なほほんなど、おじいさん、おばあさんが「なんなんだぶ」と言つていて、父さん母さんは、

『歎異抄』に「本願を信じ、念仏もうさば仏になる」とあります。念仏を申したら本当に仏に成るのでしょ。なぜ仏様に成ることができるのでしょうか。お念仏を称えると、うご利益を積むと、仏様に成るといふ功徳を積むと、仏様に成るといふ利益がいただけ、そう考えている人が多いのです。浄土宗はそういう人達がいたのです。念仏をたくさん称えれば称えるほど仏様に成れるのだと。

でも、親鸞聖人はそうではないとおっしゃるのです。同じ法然上人の教えをいただきながら、親鸞聖人だけがそういうのは私たちのお念仏じゃない、とおっしゃるのです。ご本願、具体的には第十一願の「^{ひしげつど}必至滅度の願」によつて、皆さんは必ず仏に成るのです。仏に成ることに日覚めた人達は、必ず仏に成る道を完成

いるのではないでしょ。本当にそれを自分の問題として確かめなければならぬと思います。

仏教は浄土真宗に限らず全部、仏と成るための教えであり、親鸞聖人の教えはお念仏によって仏と成るの

ですね。私達はお念仏をいただきながら、本当に私のお念仏は仏に成りたいと願つてある念仏なのか、必ず仏に成れることを喜んでいる念仏なのか、そういうことを確かめなければいけないと思います。

度にいたらしめるのです。滅度というのは大涅槃のことです。本当の仏様と成つて目覚めた者が、目覚めたことを大涅槃と言うのです。親鸞聖人は、それを無上涅槃ともおっしゃつています。それに必ず至らしめるということが、第十一願「必死滅度の願」です。それを親鸞聖人は「証大涅槃の願」ともおっしゃつています。だから親鸞聖人のお念仏は、念仏して仏に成るのではないのです。仏に成ることがもう決まつていてから、それを喜んでお念仏するのです。これが淨土真宗の基本です。煩惱成就のこの私が、弥陀の本願に出遇い、それを信ずることによつて必ず仏に成っていくことが明らかであるから、そのことを喜ぶのです。それが親鸞聖人のお念仏です。『大經』下巻の第十八願の願成就文の中に出てくる言葉です。

お念仏の教えが盛んである土地柄であるからこそ、落とし穴となつて

いるのではないでしょ。本当にそれを自分の問題として確かめなければならぬと思います。

『歎異抄』に「本願を信じ、親鸞聖人の教えをいただきながら、親鸞聖人だけがそういうのは私たちのお念仏じゃない、とおっしゃるのです。ご本願、具体的には第十一願の「^{ひしげつど}必至滅度の願」によつて、皆さんは必ず仏に成るのです。仏に成ることに日覚めた人達は、必ず仏に成る道を完成

もんごみょうどう
聞其名号、信心歡喜

『仏說無量壽經卷下』真宗聖典 四四貞)

これが親鸞聖人のお念仏なのです。その名号を聞いて、それを信じて歓喜するのです。その名号とは何かと言ふと、あなたは必ず仏様に成れるのですよということです。そのことが名号を聞くということなのです。

あなたは必ず仏様に成っていく、必ず滅度に至らしめられる、大涅槃というお覚りの究極にいたることがでいるのです。そういう身であるということをご本願を信ずることによつていただかれたのです。それを歓喜するのです。これが親鸞聖人のお念佛です。

南無阿弥陀仏というお念仏のお声を聞いて、そしてご本願を信ずることによって、必ずこの煩惱成就の私でも、仏様と成っていく世界が開かれているということです。今は煩惱だらけの人間ではあるけれども、必ず仏様と同じお覚りの世界へと還つていけるのです。そのことを喜ぶのです。それを歓喜とおっしゃっています。「歓喜」とは、まだ得られていないが、必ず得られることを喜ぶという意味です。このようにして

「聞其名号、信心歓喜」という『大経』のお言葉をいただいていらっしゃいます。

八 生死

「私が生きているの」ではなく、「生かされている私」であり、「生かされるいのち尊し」というのちへの目覚めを持たれたのがお釈迦様です。そのことに目覚めたから仏様と言ふのです。仏様というのは「目覚めた人」ということです。いのちの有り様に目を開かれ、そのことをお覚りになつたということです。そのお覚りをいただいて、私達も「生かされないのちが尊し」と、そういうのちに目覚めて生きる者と成りたいと願うのです。ここにお念仏をいただいていく訳ですね。

それは、自分で自分を反省して「私は愚か者である」ということではないのちに目覚めて生きる者と成りたいと願うのです。ここにお念仏をして、出離の縁あることなし。

自身は現にこれ罪惡生死^{さいあくしじゅうじ}の凡夫、曠劫^{こうごく}より已來^{このかた}、常に没し常に流転^{もんてん}して、出離^{しうり}の縁^{えん}あることなし。

(『教行信証』真宗聖典二一五頁)

ところが、「生かされるいのち」が尊いというお釈迦様のお覚りに出遇いながら、「そのとおりであったな」と頷かせていただきながら、それには背いて生きている私達の日暮しがあります。私達は生活の中で、

「私が、私が」と言つて自分を主張し、仲良くしてみたり喧嘩をしてみたり、楽しんでみたり恨んでみたりして、せつかくのいのちを無駄遣いし、空しく過ごしているのです。そういう私たちの現実があるのです。「生かされるいのち尊し」というお釈迦様の教えを本当にいただいたならば、そんなことは何の問題にもならないはずなのに、そういう日暮しをしている私がいる訳です。

お釈迦様のお覚りである「生かされるいのち尊し」という目覚めに出遇つて、私もそのように生きる者と成りたいと願いながら、そのように生きられない己自身を深く悲しまれたのが、善導大師であります。その善導大師の「機の深信」といわれているお言葉があります。

人は世間でいう愚か者です。親鸞聖人のおっしゃる愚か者は、そうではないのです。親鸞聖人は、仏様の目覚めに頷き仏に成りたいと願いながら、それに背いている生き方を愚か者と言っているのです。人間の理性に背くことを愚か者といつているのではないのです。

お釈迦様のお覚りである「生かされないのち尊し」というお釈迦様の教えに出遇つて、私はそのように生きる者と成りたいと願いながら、そのように生きられない己自身を深く悲しまれたのが、善導大師であります。それは、自分が自身を見つめられて、深く悲嘆されたのです。それで親鸞聖人の淨土真宗の基本は、「己は愚か者である、愚である」ということです。それは、自分で自分を反省して「私は愚か者である」ということではな
いのです。お釈迦様のお覚りに出遇い、そうであったと頷かせていただきながら、それに背いて生きていることを「愚か者」と言うのです。人間は良いことをして悪いことはしていけないので、「私は悪いことをしています。すいません」というレベルでしか了解していないのは、こ

死の凡夫であると。現に私は罪を犯し、悪を行っている生死の世界にいるのです。

生死というのは、この身体が生まるで死ぬ、そのような意味だけではないのです。仏教で生死というのは、そんな生物的な話ではないのです。生死というお言葉は、生まれ変わりを繰り返さなければならないという

インドの宗教、今でいえばヒンズー教におけるいのちの考え方です。輪廻に転生するということです。私は死んだら、この世でどれだけ良いことをし悪いことをしたかで、それに見合って生まれ変わることを見合って生まれ変わることを現代の人もほとんどがそう信じています。だから、今のヒンズー教徒はインドのガンジス川で体を清めて神様にお祈りするのです。もし牛に生まれ変わったら繋がれて生きなればならないのです。印度では牛を食べませんから、殺されることはないけれども、繋がれて生きなくてはいけない。もし鳥に生まれ変わったら、矢で射られるかもしない。もしバラに生まれ変わったら、

摘み取られてしまう。だから、再び人間として生まれ変わりたい、と神様にお願いするのです。私たちはこのような輪廻転生という信仰を持つていませんから、このような話を聞いても、信じられませんが、インドの人たちは、このような輪廻転生を信じているのです。

その輪廻という言葉は、インドの言葉ではサンサーラといいます。このサンサーラという言葉を中国人のが漢字に直すとき、時々「輪廻」ではなく「生死」と漢訳したのです。なぜかというと、輪廻は生まれ変わり死に変わりを繰り返します。その輪廻はどうして成り立っているのでしょうか。生きていきたい、死にたくないという人間の思いによって成り立っているのです。それが生死の世界です。単に生物的に生まれて死ぬままで間、私が生まれて死ぬまでの間、私を成り立たせているのは何なのかな。それは生きていきたい、死にたくないという生死への愛着です。

界のことを生死の世界といふのです。みなさまも長生きしたいでしよう。こんな苦しいのにどうして長く生きる必要があるのかと思いますが、それでも生きていたい、死ぬのは嫌だ。そのようにしがみついていることによつて成り立っている世界を生死というのです。

そういうあり方を善導大師は機の深信の中で、「常に没し常に流転して」とおっしゃるのです。常に沈み込むということは、長く生きていたいということです。それが「常に没し」ということです。生死の中にはまり込んでしまい、死んでもまた生まれ変わつて生死を繰り返したいと生きにしがみつくのです。それが「常に流転し」ということです。そういう生き方を罪悪だと。人として生まれた喜びを知らずに、生死にしがみついて生きているからです。たゞ生かされるいのち尊しというお

人を殺したとか、人のものを盗んだことを仏教では罪悪と言うわけではありません。常に生死にしがみつき、生死の中で何とかしたい、生きたい、死にたくないといつてはあります。そういう生死にしがみついて生きながら生きているのです。犬や猫はそうではないのです。人間だけがこういう愚かなことで苦しみながら生きているのです。そういう生き方を罪悪だと。人間だけがこう生きなっています。そういう中にいる私なのだと。仏様の教えに出遇つて「そうあります」と領きながらも、そのところには生き抜くことが出来ないこの私であります。その己自身を最も深く見つめたのが善導大師のこのお葉なのです。

その輪廻という言葉は、インドの言葉ではサンサーラといいます。このサンサーラという言葉を中国人のが漢字に直すとき、時々「輪廻」ではなく「生死」と漢訳したのです。なぜかというと、輪廻は生まれ変わり死に変わりを繰り返します。その輪廻はどうして成り立っているのでしょうか。生きたい、死にたくないという人間の思いによって成り立っているのです。それが生死の世界です。単に生物的に生まれて死ぬまでの間、私が生まれて死ぬまでの間、私を成り立たせているのは何なのかな。それは生きていきたい、死にたくないという生死への愛着です。この愛着によって成り立つている世

たのです。罪であり悪であるのです。

九 本願

そのことを私自身の問題として考えてみますと、善導大師のこのお言葉は我が身のこととして、私はよくいただけるのであります。そんな私はどうしたらいいのでしょうか。そこで善導大師は、「そんな私が仏様に成つていく世界が開かれているのですよ」とおっしゃったのです。それが「法の深信」といわれている本願です。

かの阿弥陀仏の四十八願は衆生を摂受して、疑いなく慮りなくかの願力に乗じて、定んで往生を得。(『教行信証』真宗聖典二二五頁)とあり、死ぬ瞬間まで生きていたい死にたくない、最後の一息までこの生死の世界にしがみついて生きている私であるけれども、「生かされるいのち尊し」という自覚めによつて与えられている世界に必ず至らしめられますよ、と願っているのが本願です。そういう善導大師は、ご本願に出遇えたことを喜んでおられる訳です。「生かされるいのち尊し」

という世界を、自分の力でつくり上げようとしても、それに背いて生きている現実では無理です。ではどうしたらいいのでしょうか。阿弥陀仏の四十八願は、私たち悩める衆生をそのまま引き受け下さっているのです。

「疑いなく慮りなく」とは、どうなのかことなく、疑つたりすり慮つたりすることなく、かの願力に身をまかせて、それを信じて「定んで往生を得」ことができるのです。



受けて下さっているのです。そのまま引き受け下さつて、疑いなく慮りなく、どうなのかことなく、疑つたりすり慮つたりすることなく、かの願力に身をまかせて、それを信じて「定んで往生を得」ことができるのです。

「生かされるいのち尊し」というお釈迦様のお覺りに同意した世界において、「そうでありました」と頭が下がった世界において、本願ははたらくのです。だから、犬や猫には本願ははたらきません。キリスト教徒には本願ははたらきません。お釈迦様の教えに出遇つて、「そうでありました」といのちの真実に出遇つて頷いた者は、必ず本願によってお釈迦様と同じ世界へと還らせていたのです。本願というのは、本願だけではなく、それが本願ということです。本願とはどこから出てきたのか、本願とは何でしょうか。仏教というの

あるならば、必ずその真実の通りに生かされる者となりますということです。だから、「生かされたいのち尊し」というお釈迦様の目覚めに出遭っている者で、あるのちの真実に出遭つた者で、お釈迦様の「生かされたいのち尊し」というお覺めをもつた者は、みんなお釈迦様と同じように大涅槃に至らしますよと、こう誓つてくださっている、それが本願ということです。

「生かされるいのち尊し」というお釈迦様のお覺りに同意した世界において、「そうでありました」と頭が下がった世界において、本願ははたらくのです。だから、犬や猫には本願ははたらきません。キリスト教徒には本願ははたらきません。お釈迦様の教えに出遇つて、「そうでありました」といのちの真実に出遇つて頷いた者は、必ず本願によってお釈迦様と同じ世界へと還らせていたのです。本願というのは、本願だけではなく、それが本願ということです。本願とはどこから出てきたのか、本願とは何でしょうか。仏教というの

は、お釈迦様のお覺りから始まっているのであり、そのお覺りを私達に実現させようとする仏の願いが本願なのです。お釈迦様のお覺りを私達に差し向けて下さっているのが本願なのです。或る人は、私たちのいのちの根底にある願のことを本願といふと説明したりしますが、様々なご縁によって成り立っている私の根底に、そんな本願があるはずはないのです。私の根底にあるのは、罪惡生死の凡夫という事実しかないのである。そんな私がお釈迦様の教えに出遇つて目覚めたならば、必ずお釈迦様と同じ世界へと還つていくことが出来ると誓っているのです。「そうせずにはおかないと誓つてゐるのが本願です。そして善導大師は、その本願によつて「定んで往生を得」、必ず仏様のお覺りの世界へと還らせてもらえるとおっしゃるのである。どんなにお覺りに背いて生きようが、どんなに罪惡生死の世界に沈み込んでいようが、必ずお釈迦様と同じ世界へと、お覺りの世界へと還らせてもららうのです。最終的に還つていくお

覚りの世界、そこに至らしめる本願を「必至滅度の願」あるいは「証大涅槃の願」と言うのです。

お釈迦様は八十歳でお亡くなりになつた時に、自ら「滅度」を示されました。滅度とは仏教の専門用語であつて、「大般涅槃」のことです。完結されたお覚りの世界、お覺りが完結していく証果の世界のことです。親鸞聖人のお言葉でいえば「大涅槃」・「無上涅槃」です。お釈迦様がお亡くなりになるときにお示しくださつた大涅槃の世界・滅度に私達も還つていいけるのですよと、そのことを誓つていいけるのが「必至滅度の願」です。この本願に至らしめる本願が第十八願としての「念佛往生の願」・「至心信樂の願」です。この本願によつて、「ご本願を信じて生きる者となりなさい」と、「そうしたら必ず滅度に至ることが出来ますよ」と、そのことが説かれているのです。お釈迦様のお覺りに出遇つてそうなりたいと願つている者は、必ずお釈迦様と同じになります、同じにせずにほかないと誓つたのが法藏菩薩です。そ

ういうことを親鸞聖人はいただいて、これらの本願の意味をきちんとおさえられておられるのです。それが浄土真宗という教えなのです。
だから、「念佛成仏」ということを自分の中でもう一度問い合わせながら、私は必ず成仏できることを喜んでお念佛をさせてもらつてゐるだろうか、そのことをお一人お一人が自分で確かめて、そして聞法を続けながら、確かめをどんどん深めていくのです。いつも私達は、生死に逆戻りしてしまふから、絶えず絶えずそのことを確かめていくのが浄土真宗における聞法ということです。「分かった」ではダメなのです。頭で「分かった」知識というものは、身につきません。そうではなくて、身に染み込んでいく。そのためには、私達は聞法を通して、「念佛成仏」という浄土真宗にとって最も基本的な教えを、お一人お一人が何度も何度も確かめていただけたならばと思うことです。

(了)

このたびの富山別院報恩講法話講師の小川一乗先生の書籍およびカレンダーを紹介します。ご購入の際は発行元へご連絡ください。

2015年カレンダー

「妙好人・浅原才市の言葉」

絵 畠中光享／解説 小川一乗
名残惜し 煩惱は臨終までも頼もしや
信心は未来まで 浄土を楽しむ なむあみだぶつ
50部より名入れ印刷できます。
寸法：92×30cm 13枚 價格：2,000円+税

大好評 発売中

方丈堂出版

京都市伏見区日野不動講町38-25
TEL 075-343-0458 FAX 075-371-0458
http://www.hozokan.co.jp/

仏教のさとりとは—釈尊から親鸞へ—

著 小川一乗 價格 2,376円(税込)
釈尊が説いたさとりと、他力信心の救いの関係とは——。仏教学の立場からの、『教行信証』証卷の画期的な解説。

仏教からみた念佛成仏の教え

著 小川一乗 價格 1,080円(税込)
何のために念佛を唱えるのか、佛教徒の目的とは何か——。佛教者の目指す基本である「成仏」について、改めて問い合わせます。

TEL 600-8153 京都市下京区正面通烏丸東入
TEL 075-343-0458 FAX 075-371-0458
http://www.hozokan.co.jp/

同朋会運動寄稿

富山教区における同朋会運動の展開 ～その取り組みと課題を通して見る～

第十二組 常念寺住職 寺田正利氏

今号は、第十二組常念寺住職寺田正利氏に寄稿していただきました。寺田氏は、富山教区の同朋会運動に初期のころから取り組んでこられた方々のお一人です。今回、富山教区、特に第十二組の同朋会運動について、様々な資料を紐解き、ご自身が体験されたことを交えながらご執筆いただきました。

特別伝道として始まる

昭和三十七年の七月に同朋会運動として実施されました。

富山教区では、昭和四十年度から、は、色々な表現がなされていますが、私が思いますのは、現在、寺と門徒のつながりが葬式と法事だけになっていて、聖人の教えを仰いでいくものとして「それでいいのか」ということであります。同朋会運動とは、本来の寺になり、門徒の姿に立ちかえっていこうとする運動であると受け止めています。そして、この願い

を受けて、具体的に特別伝道（以下「特伝」）、本廟奉仕団、推進員教習となり、同朋会運動が発足しました。この運動に関しては、色んな表現がなされていますが、私が思いますのは、現在、寺と門徒のつながりが葬式と法事だけになつていて、聖人の教えを仰いでいくものとして「それでいいのか」ということであります。同朋会運動とは、

歩み」です。もう一つは、『真宗』誌（昭和四十年五月号および六月号）に掲載された第十三組特伝（昭和四十年三月二十七日、念興寺を会所に開催）の記事です。

まず一つ目ですが、第十二組の特伝が昭和四十年から四十二年にかけて、年二回ずつ計六回実施されました。「第十二組の同朋会運動の歩み」には、

◆第一次特伝◆

期間・昭和四十年三月一日～七日

◆第二次特伝◆ 【七会所】
期間・昭和四十年七月一日～七日
◆第三次特伝◆ 【七会所】
期間・昭和四十一年二月二十一日～二十七日
◆第四次特伝◆ 【七会所】
期間・昭和四十一年七月四日～十日
◆第五次特伝◆ 【七会所】
期間・昭和四十一年二月十七日～二十三日
◆第六次特伝◆ 【七会所】
期間・昭和四十二年六月二十一日～二十七日

三月一日 託法寺 二十三名
二日 宗琳寺 二十一名
三日 本傳寺 三十名
四日 長圓寺 二十六名
五日 光徳寺 三十三名
六日 長安寺 十五名
七日 願樂寺 三十一名

また、前後に準備会、反省会が開催されていますが、寺院方に趣旨の徹底をはかるためなのか、育成員特伝や指定奉仕団等の実施があり、大変、多忙な三年間であったようです。今から見れば、年二回・七会所ずつの特伝実施は大変であったと思います。しかも参加者が多数あり、多い記録されています。また、第二次特伝からについては以下のとおりです（会所名・参加者数は省略）。

かりませんが、それらを知るための二つの記録があります。一つは、瓜生玄昭氏（第十二組 等覺寺）が作成された「第十二組の同朋会運動の

て、盛り上がったのではないかと思われます。取り組みや詳細な日程、そして、どの様なことが伝達され、話し合われたかについては、この記録からは分かりません。

たまたま、先程の第十三組特伝の記事が『真宗』誌に掲載されたことを思い出して、開いてみたところ、どのように実施されたかだけでなく、講話、協議会、参加者の意見など、すべて網羅されており、第十二組の記録では分からなかった内容もこの記事で知ることができ、改めて記録『真宗』誌がありました。もし、この『真宗』誌がありましたら、一読されて当時の様子を知っていただければと思います。それと、今までの聞法になかった『現代の聖典』をテキストにしての実施に、面くらわれたことでしょう。第十二組の特伝も、これに似たものであったのではないかと想像しています。この記事の中で、興味を引く参加者の声が掲載されています。引用させていただきます。

司会 その点は問題もありますが、自分は仏教をそうは思わない

壮年E 何しろ、今までの年寄の話を聞くと、死んでからあと教えるように思われますし、お説教でもそのように受けとらざるをえんのですが、そうでないといふことをはつきり出して欲しいですね。さもなかつたら、若いものは話についていけませんよ。仏教は死んでからあとの話だとと思いこんどですから。

壮年D 聞法がなかつたら我々は生活できんのだと。ちょうど稻に疏安などをやるように、こやしがなれりや我々は人生を大手ふっていかれんのだということになれば、どんなことがあっても聞きにいかにやならんということがありますよ。そうでなかつたら、なんだまた地獄・極楽の話かと……。

壮年E これまでのような説教じやちつとも魅力がありませんよ、ありがたいらしいんですけども……。

(『真宗』昭和四十年六月号より抜粋)

方によりますと、今までのあります

いんだと、気づいた人から立ちあがつてもうって、いまおっしゃるように聞き方をあらためていくことが大切だと思いますが……。

壮年E 指導者の方から一つ……。

坊さん方にそのことをいうついただけませんか。(笑い)

壮年F いろいろいっとられますが、坊さんの方から、一つ寺へ遊びに来いと、寺も抹香くさいばかりじゃないんだと、来て話さんかというような場にしてもらわんことはね、來たら南無阿弥陀仏と、となえるしかないというのじや寄りつけませんですよ。

司会 こういうことを機会に、

住職さん方も充分やっていただきけると思いますから、皆さん方にもぜひ加勢していただきたいですね。

巡回伝道の実施と問題

その後、四十二年度には第十一組が特伝指定組に、四十四年度には第十六組が特伝指定組に、そして、四十六年度には第九組が特伝指定組となって、それぞれ実施されました。その他に、指定組以外の組で、本山特伝に習って教区主催による教区特伝が実施されていました。また、特伝が

巡回伝道の実施要項について

同朋会運動の再認識と再出発を期して、教区教化委員会では、門徒研修関係の行事を巡回伝道に一本化し、総力を注ぐことになった。実施要項については次のとくですので、ご協力下さい。

目的 組内における各地域に、門信徒の自主的な定例間法の学習会を育成充実し、組を教化共同体として組織化する。

主旨 従来は推進員の発掘とその人材の養成に主眼をおき、各寺門徒代表を対象に行ってきた。それによって各組に推進員教習修了者を中心とする学習組織が生まれ、一応の段階に達した。

今年度からは、その成果に運動性を加え、点から線、線から面へという展望に立って、地域を中心とする「同朋の会」づくりに重点をおく。

実施回数 ①各組年四回とする（従来は二回）

②一回についての日数

- 十組 5日間（年間20日間）
- 十一組 4日間（〃16日間）
- 十二組 4日間（〃16日間）
- 十三組 3日間（〃12日間）

会場・対象 ①四回のうち二回は、同一会場・同一対象とする。

②従来はグループ寺院（小会）単位に門信徒代表を選んだが、今度からは、組教化委員会等で指定した地域の門信徒を対象とする。

③できるだけ地域の組織体（婦人会・町内会・青年団・老人会）などによびかける。

事前準備・組教化委員や組同朋の会でよくご検討下さい。

④二回以上の出席者を前期教習修了者とみなし、後期教習に参加して頂きます。

終わった組で推進員による「同朋会推進協議会」「推進員同朋会」「組同朋の会」などの結成を見ましたが、多くは単に法話を聞く場になり、願われていた同朋の会の育成の力に成り得ていないことが問題となり、昭和四十七年度より、今までの教区特

伝を「巡回伝道」と改称して新たな試みが始まりました。
私はこの頃自坊に帰り、組同朋の会教導（今は選定されていないようです）や副組長という役職をおおせつかり、まず巡回伝道から関わらせていただきました。教区の教化委員

会で企画立案された要項に基づいて組において実施するというやり方で、昭和五十三年度まで続けられました。まず、昭和四十七年度の巡回伝道の要項を見ていただきたいと思います。これについては『富山教区通信』第三十号に掲載されています。

（『富山教区通信』第三十号より抜粋）

第12組における巡回伝道実施状況

年度	実施回数	会所	講師
昭和47年度	年4回	8会所	日野 賢悟 師
昭和48年度	年3回	10会所	桃野 信学 師
昭和49年度	年3回	12会所	笠原 保寿 師
昭和50年度	年3回	10会所	笠原 保寿 師
昭和51年度	年2回	8会所	松扉 堯 師
昭和52年度	年2回	6会所	松扉 堯 師
昭和53年度	年2回	5会所	スタッフによる自主開催

このようにして運動や教化状況の問題をふまえて、毎年、実施要項が見されました。目的や趣旨はともかくとして、実施回数・会場・対象をみると、実施回数があまりにも多く、対象別（①総代・世話方②一般初心者③青壯年④婦人⑤モデル地区）という難しい方法での実施が願われ、この様なことができるのかと思いまして。しかし、寺院方・推進員・会所地区の皆さんのご協力を得て何か実施いたしました。第十二組における、実施回数・会場・講師は次通りです。

確かにこの巡回伝道は、同朋会運動の再出発を期しての伝道でありましたが、実施要項があまりにも細かく、また実施回数が多く、さらには対象別になっていることもあり、実施が困難がありました。しかも点検・総括ということが打ち出されて、次々と実施要項が複雑になるため、単なる法座になってしまったということも無理からぬことがありました。本当は、それぞれのご縁の場所で共に語り合い、問題や課題を見出して教えに聞いていければ良かったのではないかと思います。今ならこんな実施要項を出されると「やっていけるのか」という様な意見の一つも言えますが、当時は同朋会運動に一つの流れと熱意があり、故にそれに従つて役職上、一生懸命やるしかなかったのかもしれません。

同朋会運動十五周年大会へ

こういう展開の中で、昭和五一年の四月十五日に同朋会運動十五周年の全国大会が本山で開催されるに

あたり、事前研修が「昭和世代啓発活動」として、第十二組では壮年対象が本傳寺で四回、婦人対象が長圓寺で五回、一回の研修時間を四時間として実施されました。テーマは「真宗門徒のあかしを立てよう」でした。魚津の長圓寺で二月から三月にかけて実施されましたが、忘れもしないのは、三月四日の研修日が猛吹雪で、どうしても車で向かうことができず欠席しましたが、そういう中でも実施され、その熱意に感心しました。

そして、四月十五日の全国大会に教区全体でバス一台であつたか二台

であったか覚えはありませんが、京都へ向けて朝出発して夜帰つて来るという強行軍で参加しました。『真宗』誌では、昭和五十二年の一月号から七月号まで特集で記事が掲載されました。その中で一つだけ心に残っていることは、同朋会運動への提言の中で、高史明先生が自分の子の自死を通して思われ教えられたことを話され、最後に「この世に満ちている苦のすみすみまで念佛よ興つてく

れ」と呼ばれたことです。

この間、点検・総括が盛んに言われ、その中から基本課題として、

①古い宗門体质の克服

②現代社会との接点をもつ

③真宗門徒としての自覚と実践

が立てられて、ずっとそれを課題として運動に取り組んできたように思います。

真宗生活講座の開設

この大会をきっかけに教区で巡回伝道の見直しが行われ、「真宗門徒の基礎はその土壤作りにあるのではないか」ということになり、推進員の方が『正信偈』のお勤めの練習や聞法会を自主的に行っておられたことにヒントを得て、始まったのが真宗生活講座であります。

真宗生活講座の当初の様子については、『真宗』誌（昭和五十七年五月号）に魚津地区の様子が掲載されていますから、読んでいただければ

施されました。そして、いつの間にか、巡回伝道から真宗生活講座を基本として、そこから推進員の発掘や同朋の会の結成など、教区教化事業に関わっていただくかたちになりました。また、第十二組では、お勤めに関心のある方が多く、盛会のうちにスタッフ・参加者が一体となつて歩み出しました。しかし、日が経つにつれて「お勤めだけを習いたい」とか「スタッフも同じような顔ぶれになる」ということで、当初は四地区（小会）での共同学習を実施していましたが、昭和六十一年度から、希望寺院による自主開催となりました。その後は、開催寺院は少なくなりましたが、今でも続いているところがあります。

真宗生活講座は各組に四会所開き、それぞの会所で『正信偈』のお勤めや「お内仏の莊嚴とお給仕」を学ぶ例会を毎月開くというかたちで実

教団に対する声を聞く 移動同朋会議

それではその後、巡回伝道はどうなったかと申しますと、教団問題が深刻になっていく中で、宗憲改正に向けて、教団問題の説明とそれにに対する意見を聞くために「移動同朋会議」というかたちで行われることになりました。第十二組の場合、寺や公民館を会場にして、教えはともかくとして教団に対する期待や反感など生々しい声が聞かれました。私はその声をメモしたものを、今でも大切に持っています。移動同朋会議についてでは以下のとおりです。

このようなテーマで、スタッフを組んで三年間十会

移動同朋会議開催状況

年度	会所	テーマ
昭和54年度	10会所	東本願寺問題を考える
昭和55年度	10会所	宗門状況と真宗門徒であること
昭和56年度	10会所	新宗憲による教団の願い

所づつ実施されました。

このたび、『如大地』編集委員会より、富山教区における同朋会運動当初の頃の話を聞きたいという要望がありましたので、その展開や取り組みについて寄稿しました。

労多くして成果少なし

ざっと昭和六十年くらいまでの富山教区の同朋会運動の歩みを見て、その時々の思いを述べてきました。特に同朋会運動十五周年大会を前後していわれた点検・総括、そして教区の教化委員会で立案された実施要項による実施は困難極まるものがありました。そのため、当初の同朋会運動の願いに応えきらず、かえって古い体質・信仰に乗っかって、少しだけ近代化したに過ぎなかつたよう思います。そこから生まれた寺方も推進員も、そのことにご苦労しながらも、開け行く成果がなかつた、と私は総括しておきたいと思います。

最後に、富山教区の同朋会運動の今後の歩みについてですが、ヒント

になる言葉が一つあります。それは、宮城顕先生の『仏道に生きる』という本の中になります。ある週刊誌

さていく歩みが願われているのでないでしょうか。

同朋会運動は信仰運動とうたわっていますが、いろいろな教団組織の現状、その時その時の問題に即応しながら、変遷をたどってきています。したがって、いきおい目標が立てられ、その目標を達成するための計画がたてられるほどいろいろな計画が立てられてきた。こういったことを今日の時点で改めて考えなおす必要があると思います。

(『真宗』昭和五十二年三月号より抜粋)

その後の主な同朋会運動の事業展開

真宗同朋教室	昭和56年度より
親鸞に聞く会	昭和56年度より
真宗生活講座 Bコース	昭和60年度より
推進員養成講座	平成3年度より

研修会報告①

「第五十四回児童研修大会」開催

【8/4~6】

テーマ 友達をつくるう
会場 滑川市

クラフト作りの様子

野外活動は
公園内にい
くつも置か
れた段ボ

一ホルダー
ー

二日目の午前中は公園を班ごとに

探検し、三日目のゲームに使うクイズを作りました。午後からはパークゴルフをし、夜はクラフト作りを行いました。カラフルなビーズをプレートの上に並べてアイロンで溶かして固めてキ

天体観測をしました。

育館で集団ゲームを行い、正信閣の

おけいこの後、夕時勤行、天文台で

初日は、スタッフといっしょに体

然公園を会場に、第十一組当番で行われました。参加者は四十人でした。

八月四日から六日まで、児童研修

大会が滑川市の青雲閣・東福寺野自

然公園を会場に、第十一組当番で行

われました。参加者は四十人でした。

初日は、スタッフといっしょに体

育館で集団ゲームを行い、正信閣の

おけいこの後、夕時勤行、天文台で

天体観測をしました。

二日目の午前中は公園を班ごとに

探検し、三日日のゲームに使うクイズを作りました。午後からはパークゴルフをし、夜はクラフト作りを行いました。カラフルなビーズをプレ

ートの上に並べてアイロンで溶かし

て固めてキ

ル箱から班

ごとに指定

された番号

の物を探す

と、中には

他の班が考

えたクイズ

がありまし

た。六つの

宝箱を探し

て、その中

の問題を解

き、一時間

以内でゴー

ルを目指し

ました。その後、参加者の皆さんに

感想文を書いてもらい、昼食を食べ

て閉会となりました。

三日目の

特別に怪我をした子もなく、みんな

来た時よりも黒く焼けている様子で

それが教区を横断する形となると、

実のところはさっぱり交流が無いの

が実情です。その結果、問題点が

「自分トコの寺」で留まってしまい、

客観的に見ることが出来ていません。

「ウチは昔からこうだから」と言つ

ました。

普段、一つのお寺とその門徒の皆

さんがお互いに話し合うという機会

は盛んに持たれていると思いますが、

それが教区を横断する形となると、

事でみんなが悩んでいたのだとい

うことが分かって、自分の悩みが他

の方の意見であつさり解決したりと、

見て楽しく、参加して楽しい会でし

た。

寺院の活動になかなか打開策を見

出せないまま

お互いに苦し

んでいる寺と

門徒の方々に

こそ、ガス抜

きがてらに参

加していただき

たいと感じ

ました。

班別座談会の様子

富山如大地第136号



富山別院報恩講の様子

私が別院の報恩講で掛役として関わらせていただく中で大きく変わったことは、仏事に対して以前より真摯に向き合うことになったことである。

掛役として儀式作法の講習を受けた中で、今までいかに自分が作法について無関心であったかが知らされた。自坊での内陣での作法をとつてみても、以前は一つ一つの作法に关心を持たずに行っていたが、講習を受けてからは足の運び一つをとつても意識するようになった。

掛役をする上で自分が特に気をつけていることは二つあり、一つは常に見られているということを意識することである。背筋を伸ばすのはもちろん手の先まで神経を張り巡らせることが大切である。二つ目はミスをミスにしないことである。ミスがないように気をつけるのはもちろんであるが、人間である以上ミスをしてしまう時がある。それをいかにミスにみせないように出来るかということを意識し作法をしている。

まだまだ学ぶべきことが多いので精進したい。

第十二組 常徳寺 北條智秀

私が別院の報恩講で掛役として関わらせていただく中で大きく変わったことは、仏事に対して以前より真摯に向き合うことになったことである。

掛役として儀式作法の講習を受けた中で、今までいかに自分が作法について無関心であったかが知らされた。自坊での内陣での作法をとつてみても、以前は一つ一つの作法に关心を持たずに行っていたが、講習を受けてからは足の運び一つをとつても意識するようになった。

掛役をする上で自分が特に気をつけていることは二つあり、一つは常に見られているということを意識することである。背筋を伸ばすのはもちろん手の先まで神経を張り巡らせることが大切である。二つ目はミスをミスにしないことである。ミスがないように気をつけるのはもちろんであるが、人間である以上ミスをしてしまう時がある。それをいかにミスにみせないように出来るかということを意識し作法をしている。

まだまだ学ぶべきことが多いので精進したい。

[10/6~8]

「富山別院報恩講」厳修

会場 富山別院本堂

富山教区仏教青年会活動報告

「北陸連区ソフトボール大会」開催

会場 スポーツプラザ(富山市)

[9/11]

九月十一日に北陸連区ソフトボーラー大会が開催されました。この大会は北陸連区内と周辺教区の仏教青年会員、青少年委員会員が懇親と情報交換の為に毎年行っているものです。今年度は富山教区仏教青年会が企画運営をさせていただき、富山市婦中町のスポーツプラザを会場に開催しました。高田、高岡、能登、金沢、小松、大聖寺、富山から約八十名の参加者がありました。

大会は晴天のもと行われ、小松・大聖寺合同チームが優勝しました。富山仏青は惜しくも優勝は逃しましたが準優勝という好成績で大会を終えました。大会終了後には懇親会も行われました。各教区からの参加者の中には、ボランティア、教学、声明など様々な活動を行っている会員が大勢おられ、情報交換をする中で互いの活動に刺激を与えたるよう思います。

この大会は、単に「みんなで楽し



第十組 聰成寺 桃井量純
富山教区仏教青年会代表

くソフトボールをやろう!」という大会ではありません。もちろん懇親も大切な目的ではありますが、教区内だけではなく他教区で活躍する仲間達とも出合い、語り合う中で「それぞれが課題としていることを見つけられる場」です。こういう「場」を仏教青年会は大切にしていきたいと考えています。



今回の紹介は、

入善・黒部地区の「聴聞の集い」です。

二〇一四年五月、富山
教区・富山別院主催によ
る宗祖親鸞聖人七百五十
回御遠忌法要が厳修され
ました。その讃仰事業と
して『百人百話』の法座が開催され
ました。宗祖の御遠忌が、私たちの
聞法の歩みの新たな出発となるよう
にと、又、五十年後の八百回御遠忌
へとつながるように、たくさんの方々
が願いを込めて教区の皆様のご協力の
もと実施され、多くの方々に足を運
んでいただきました。『百人百話』
を通じていろいろな御意見、さまざま
な御感想もいただきました。それ
らを受けて、別院では日曜・水曜定
例講座が新たに始まり、たくさんの
方々にお参りいただいております。



二十六日には本傳寺（黒
部市沓掛）にて第一回
「聴聞の集い」を開催す
ることとなりました。お
陰様でたくさんの方々に
お参りいただきました。
明榮寺さんは黒部の住
職さんと若院さん、本傳
寺では入善の住職さんと
若院さんがそれぞれ四十
分程法話しました。終了

声がけにより、「おじい
ちゃん、おばあちゃん、
お父さん、お母さん、お
孫さん、気軽にお参り下
さい」という呼びかけの
もと、九月二十五日には
明榮寺（入善町春日）、

であります。別院から離れた地域
の方々には、遠すぎてなかなか足を
運んでいただけませんでした。それ
で法要終了後、有志の方々より是非
近くでそういうご縁を作つて下さい
という要望をいただき、第十三組明
榮寺住職（高櫻大信さん）からのお

注意すべき点等を話し合う時間も持

ちました。伝えるべきことと、伝え
ることの難しさを改めて感じました。

なお、参加費はいただきませんで
したが、東北の被災地へ送りますと
説明し、お賽銭をいただきました。
二〇一五年からは、三月、六月、
九月に入善・黒部両地区にてそれぞ
れ開催予定です。

「聴聞の集い」を共に学び合う場
として真摯に続けていきたいと考え
ております。皆様の参加をお待ちし
ております。

職さんのお話を聞いてみたい」とい
うことが始まりでした。御遠忌讃仰
事業としての『百人百話』でしたか
ら、富山別院を会場に実施された訳



退任のご挨拶

退任のご挨拶

新任のご挨拶

組織部嘱託 石川 真也



皆様におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

久留米教務所主計 印牧 浄



このたび、久留米教務所勤務を命ぜられ十月二十日付をもつて着任いたしました。

富山教務所主計 藤宗 智秋



このたび、月二十日付けで富山教務所主計を拝命しました。

教区だより

(敬称略)

教区役職者の改選

監察委員

(任期 二〇一四年十月一日～二〇一七年九月三十日)

第九組 圓龍寺 圓山 達行

第十組 西源寺 上田 晓暎

第十一組 圓光寺 森 孫雄

第十二組 勝福寺 大中臣春樹

第十三組 淨慶寺 安部 英憲

選舉管理会委員

(任期 二〇一七年六月三十日まで)

会長

第十組 浄光寺 齊藤 弘道

会長代理

第十一組 真敬寺 原 教守

委員

第十二組 善念寺 岩田 誠雄

委員

第十組 常念寺 金山 弘明

補充員1

第十三組 念興寺 瓜生 義堯

補充員2

第九組 永源寺 島倉 道雄



さて、私こと石川真也はこのたび二〇一四年八月一日付で組織部教務嘱託の任を拝命いたしました。富山教務所在職中は公私にわたり一方ならぬご懇情を賜り厚く御礼申し上げます。私にとって富山教区は宗務役員として初めての任地であり、宗務生活においての道標となつております。今後は浅学非才の身でありますのが宗門発展のため全力を尽くす所存でございますので、なにとぞ一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。富山教区の皆様、短い間ではありましたが、ありがとうございました。

さて、私こと石川真也はこのたび二〇一四年八月一日付で組織部教務嘱託の任を拝命いたしました。富山教務所在職中は公私にわたり一方ならぬご懇情を賜り厚く御礼申し上げます。私にとって富山教区は宗務役員として初めての任地であり、宗務生活においての道標となつております。今後は浅学非才の身でありますのが宗門発展のため全力を尽くす所存でございますので、なにとぞ一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。富山教区の皆様、短い間ではありましたが、ありがとうございました。

さて、私こと石川真也はこのたび二〇一四年八月一日付で組織部教務嘱託の任を拝命いたしました。富山教務所在職中は公私にわたり一方ならぬご懇情を賜り厚く御礼申し上げます。私にとって富山教区は宗務役員として初めての任地であり、宗務生活においての道標となつております。今後は浅学非才の身でありますのが宗門発展のため全力を尽くす所存でございますので、なにとぞ一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。富山教区の皆様、短い間ではありましたが、ありがとうございました。

* このたび、管理委員の圓山達行氏（第

九組 圓龍寺）の辞職に伴い、第1補充

員の金山弘明氏が管理委員に就任され、

第2補充員の瓜生義堯氏が補充員1に繰

り上がり、十月十日に開催された教区会

参事会の同意を得て、島倉道雄氏が第2

補充員に就任されました。

住職就任

(一〇一四年七月一日～十二月三十一日)

(一〇一四年七月二二十八日)

第十二組 長樹寺 前田 潤

得度式受式

(一〇一四年七月一日～十二月三十一日)

寺院の解散について

第十組 満念寺 石崎 正子
宗務總長承認日 二〇一四年三月四日

第十組 信願寺
宗務總長承認日 二〇一四年六月七日

第十一組 毫照寺
宗務總長承認日 二〇一四年六月七日

第十一組 加藤 薫
富山別院定例講座
教区門徒会常任委員会
教区門徒会(通常会)

第十二組 福恩寺 加藤 聖義
富山別院定例講座
富山別院定例講座
教区門徒会(通常会)

第十三組 蓮通寺 河村 信正
富山別院定例講座
富山別院定例講座
教区門徒会(通常会)

二〇一四年九月七日
第十組 永宗寺 永崎 真田子
第十組 永宗寺 永崎 成美
第十三組 光誓寺 西山 しほ



教務所人事異動

教化日誌

(一〇一四年七月一日～二〇一四年十二月三十一日)

富山教務所嘱託 石川 真也
富山教務所書記補に任命する

富山教務所主計 印牧 浄
久留米教務所主計に任命する

富山教務所主事 藤宗 智秋
財務部主事 藤宗 智秋

富山別院定例講座
全国教区門徒会正副会長会

富山別院定例講座
『如大地』編集委員会

富山別院定例講座
専任輪番会

富山別院定例講座
社会教化小委員会

富山別院定例講座
青少幼年教化小委員会

富山別院定例講座
寺族研修小委員会

富山別院定例講座
門徒研修小委員会

富山別院定例講座
教区同朋会

富山別院定例講座
組織拡充小委員会

富山別院定例講座
教区同朋の会 総会

富山別院定例講座
割当審議委員会

富山別院定例講座
富山別院定例講座

(八)法要											
1日	8月	30日	29日	28日	27日	26日	25日	24日	23日	22日	21日
戦死・戦災死者追弔法要兼申経法要	富山別院暁天講座(～31日)	教区門徒会(通常会)	富山別院定例講座								
11日	9月	10日	9日	8日	7日	6日	5日	4日	3日	1日	4日
北陸連区ソフトボール大会 (富山教区主催)	富山別院定例講座	組門徒会役員研修(～11日)	第十組組門徒会	第十組組門徒会	第十組組門徒会	第十組組門徒会	第十組組門徒会	第十組組門徒会	第九組組門徒会	第九組組門徒会	第五十四回児童研修大会(滑川市) 【谷口奈青理氏】
富山県真宗大谷派教誨師会定例総会	富山別院定例講座	富山別院定例講座	富山別院定例講座	富山別院定例講座	富山別院定例講座	富山別院定例講座	富山別院定例講座	富山別院定例講座	富山別院定例講座	富山別院定例講座	太谷大学同窓会公開講座(～6日)

12日	『如大地』編集委員会
14日	富山別院定例講座
16日	青少年幼年教化小委員会 若坊守學習会
17日	儀式作法講習会 解放運動推進協議会
18日	富山別院定例講座
21日	富山別院定例講座 富山別院彼岸会 (～24日)
22日	坊守聞法講座
25日	ハンセン病問題ふるさとネットワ ーク富山シンポジウム
26日	相続講員物故者追弔法要兼彼岸会 (富山小会主催)
28日	富山別院定例講座
10月	
1日	あいあう会
6日	富山別院定例講座 富山別院報恩講 (～8日)
12日	全国教区教化委員長会 (～13日)
11月	
5日	教区同朋の会報恩講 富山別院定例講座 北陸連区所長・主計会 (～6日)
12日	全国教区教化委員長会 (～13日)
12月	
3日	坊守会 若坊守会
5日	『如大地』編集委員会 富山別院定例講座 『光華』編集会議 富山別院定例講座
6日	子ども報恩講 富山別院定例講座
7日	全国駐在教研修会 (～10日)
9日	富山別院定例講座
10日	富山別院定例講座 富山別院定例講座 第三回門徒戸数調査に向けた説明会
14日	富山別院定例講座
15日	寺族研修小委員会
16日	富山教区監察委員講習会
17日	解放あいあう定例学習会
22日	富山別院定例講座 (富山解放連・人権週間企画)
24日	富山別院定例講座

『如大地』第136号はいかがでしたでしょうか。本誌を読まれてのご感想、ご意見等につきましては、同封のアンケート用紙にて富山教務所までご連絡ください。アンケートへのご協力をお願いいたします。

編集後記

各寺院の報恩講が終わり、門徒さん宅にての報恩講が終わりを迎えてきている頃だと思います。私も門徒さん宅の報恩講を一生懸命にお参りしている最中です。

門徒さんのお宅に、電話で報恩講のご案内をしている時に、中学生の方だとと思われる娘さんが出られました。「毎年の報恩講のご案内をしております」と私が言うと、娘さんから「報恩講って何け」と返事が返つてまいりました。

私は、一瞬なんだつたっけとなりました。報恩講とは何かと言われると思いもしなかった私がそこにいました。

報恩講は誰もが知っているので当たり前だと思っていました。その場で取り繕つて答えました。普段から意識していなければ、全く意味がないことだと思いました。私はその中学生の娘さんに、「報恩講のことをちゃんと言えるようになります」と教えられたように感じました。良い課題を頂きました。昔はあたりまえではないような、そんな気がします。

若い人達に、報恩講の意味が浸透していくような、普段からのかかわりやつながりが、今強く求められるのではないかと思いました。